

赤十字新聞

The Red Cross Journal Japanese Red Cross Society publication

■編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL.03-3438-1311
一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

10

Oct 2010

Vol.845 <http://www.jrc.or.jp>



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society



①医療機能を持つ海上自衛隊の護衛艦「ひゅうが」に乗り込む日赤救護班 ②自衛隊員との綿密な連携を図る救護班員 ③停泊する「ひゅうが」 ④九州各県から沖縄での訓練に参加 ⑤艦内での応急救護訓練

一人でも多くの命を救うために

九州8県支部合同災害救護訓練

沖縄・北谷町

その時、一人でも多くの命を救いたい——
日本赤十字社九州8県支部による合同災害救護訓練が9月3日、沖縄県総合防災訓練と合同で、沖縄本島中部の北谷町で行われました。訓練は沖縄本島近海を震源とするマグニチュード7.4の地震が発生し、津波警報も出されたとの想定。

主会場となった同町フィッシュヤリーナ地区と、避難者などを収容・救護することを想定した海上自衛隊の護衛艦「ひゅうが」での訓練には、九州各県の日赤救護班や日赤奉仕団など合わせて約300人が参加しました。

各県の救護班や「こころのケア」担当の職員、防災ボランティアは、福岡県から自衛隊の輸送機や大型ヘリなどを乗り継いで次々に会場に入り、猛暑のなかにもかかわらず、本番さながらの応急救護活動にあたりました。

本訓練をきっかけに発足の運びとなる地元、北谷町赤十字奉仕団も避難所の支援活動などに従事。団員となる住民の方は「訓練を通じて、災害時の赤十字の活動についてだいぶ理解することができました。新しい私たちの奉仕団についても、皆さんにPRできました」と感想を語りました。

命と安全を守るため 各機関が強く連携

沖縄県総合防災訓練には県や市町村、日赤、自衛隊、消防、DMAT(災害派遣医療チーム)など71機関、約2000人が参加しました。

日赤沖縄県支部事業推進課の大出明美課長は「それぞれの機関で活動方法や指揮系統などに違いがありますが、それを乗り越えて、『命と安全を守る』という一点でつながる機会になりました」と、訓練の意義を語りました。

パキスタン洪水被害
国際赤十字が
緊急支援



©IFRC

建国以来最悪の洪水被害に襲われたパキスタン。国際赤十字では日赤を含む多国籍チームを派遣し、緊急支援活動を展開中です。(8面に活動の詳細と被災地報告を掲載)

12代目市川團十郎さん
看護学生にエール

「日本赤十字社看護師養成120周年記念 看護学生の日」といって、9月15日、都内で開かれ、歌舞伎俳優の12代目市川團十郎さんが全国から参加した720人の看護学生を前に講演。本格的に役者の道志したころなどを振り返って、「自分の『心』を育てて」と激励しました。(2面、4、5面に関連記事)



看護学生にやさしく話しかける12代目市川團十郎さん

伝統と「人道」精神を未来に紡ぐ

日赤看護師養成120周年記念 看護学生のつどい

看護師養成120年の伝統と、赤十字の理念である「人道」の精神を、未来に向かって紡いでいこうと9月15日、東京・日本教育会館で「日本赤十字社看護師養成120周年記念 看護学生のつどい」が開催されました。全国の赤十字看護専門学校で学ぶ2年生720人が、看護への志と赤十字で学ぶ仲間とのきずなを強めました。

つどいでは、歌舞伎俳優の12代目市川團十郎さんが記念講演。昭和60年の日航機墜落事故の救護活動に従事した前橋赤十字病院看護部長の前田陽子さんが看護師の先輩として

病を克服し、大量の輸血などにより病気を克服した経験があります。

「看護はきれいごとではなく、並大抵のことでできません。それほど大変なお仕事である」と、患者の立場でつくづく思いました」と闘病の際の経験を振り返った團十郎さん。「看護師さんの一言で救われたことも多いぶんありました」と語りました。

また半世紀にわたる舞台経験をもつ「型」を教わりますが、その奥にある「心」を勉強するのが大事。皆さんもいま「型」を教わっている段階であり、これから一人ひとりが自分で「心」を育てていくことが大切です」と看護学生を激励しました。

赤十字の精神を 実践し広げたい

「わたしの中の赤十字」と題したシンポジウムでは、大津赤十字看護専門学校の学生・辻千波さんが、駅のホームで困っていた視覚障害者に手を差し伸べた際の経験を語り、「些細で当たり前の行動の中に『人道を実践すること』がある。手助けしたい気持ちがある。『私に何かできますか』という言葉にしていきたい」と

決意新たに 「誓いの言葉」

最後に17人の看護学生がその日学んだことに触れながら、「赤十字の人道の精神を継承し、災害やいかなる時にも行動できる看護師になりたい」と「人道の実現を目指し、あらゆる状況下で患者の苦痛を和らげていきたい」と、「誓いの言葉」を述べました。

(関連記事4、5面)



記念講演をする市川團十郎さん



Our world. Your move.

赤十字150年

個人の尊重と 赤十字運動 (6)

元FRC財政委員

野々山 忠致



理念・原則なんて 机上の空論だ?!

武力紛争で一般住民に対する攻撃が絶えない現実から、住民の保護を決めた国際人道法は無意味だと言っている人がいます。しかし、それは飲酒運転やスピード違反が絶えないから道路交通法は無意味だと言っているのと同じです。道路交通法の規定は私たちの安全を守るために飲酒運転やスピード違反は許さないとする国民の意思

その一員である私たちの意思表示です。その意思を効果あるものにするため、違反者に対する刑事裁判の確立をはじめ住民保護を確実にする努力をさらに続けることこそが大切なのではないのでしょうか。

「理念や原則なんて机上の空論にすぎない」とか「そんな観念論は現場では役に立たない」と言う人もいます。しかし、赤十字の理念や原則は、実際の活動の経験や失敗の反省からつくられたものです。例えば、私たち、組織のなかにいると、とくに組織中心のもの考え方に染まって個人を

犠牲にする。この現実から「個人の尊重」の理念は生まれてきます。国や組織は、えてして自らの利益を優先して被災者の苦痛をないがしろにする。そこから、何よりも人の苦痛の軽減に努めるとする「人道の原則」がつくられました。自分の

「個人の尊重」の理念とそれに基づく原則の意義をよく理解していることが、人々の苦しみを和らげようとする努力、即ち、赤十字運動にとっても不可欠だと思います。

表示です。同じように、国際人道法は、戦争であつても一般住民に対する攻撃は許さないとする国際社会と

の空論にすぎない」とか「そんな観念論は現場では役に立たない」と言う人もいます。しかし、赤十字の理念や原則は、実際の活動の経験や失敗の反省からつくられたものです。例えば、私たち、組織のなかにいると、とくに組織中心のもの考え方に染まって個人を

犠牲にする。この現実から「個人の尊重」の理念は生まれてきます。国や組織は、えてして自らの利益を優先して被災者の苦痛をないがしろにする。そこから、何よりも人の苦痛の軽減に努めるとする「人道の原則」がつくられました。自分の

「個人の尊重」の理念とそれに基づく原則の意義をよく理解していることが、人々の苦しみを和らげようとする努力、即ち、赤十字運動にとっても不可欠だと思います。

ポイント募金 ただいま受付中!

あなたの「ポイント」で 日本赤十字社を応援してください

クレジットカードでの買い物やポイントカードの提示、会員サービスの利用などで付与されるポイント。日々の生活で知らずに貯まっていくこのポイントを日本赤十字社への寄付としてご利用いただけます。

まだ使い道の決まっていないあなたのポイントを日赤へお寄せください。



コンビニなどでおなじみのTポイントカードの場合
<http://tsite.jp/donation/index.pl> にアクセス

ここをクリックして募金画面に進みます

日本赤十字社の事業資金にご協力いただいている主なポイントプログラム (毎年/50種類)	
エポスポイント	株式会社エポスカード
okidoki ポイントプログラム	株式会社ジーシービー
デポ・マイレージ	オフィス・デポ・ジャパン株式会社
サンクスマイルメニュー	日本生命保険相互会社
セディナ (OMC) わくわくポイント	株式会社セディナ
セディナ (CF) ワンダフルプレゼント 21	株式会社セディナ
T-ポイント	カルチュア コンビニエンス クラブ株式会社
DC ハッピープレゼント	三菱UFJニコス株式会社
ナックグリーンポイント	株式会社ナック
ベネボ	株式会社ベネフィット・ワン
マイポイント・ドット・コム	マイポイント・ドット・コム株式会社
三菱東京UFJポイント	株式会社三菱東京UFJ銀行
Yahoo!ボランティア	ヤフー株式会社

●利用額に応じて自動寄付のうれしいカードも

カード利用の総額に対して一定割合を課した金額をカード会社が日赤へ寄付するカードです。カード利用者の負担はなく、持って使うだけで日赤を応援できます。

Honda C カード	本田技研工業株式会社
-------------	------------

詳しくは日赤ホームページ (<http://www.jrc.or.jp>) をご参照ください。

防災フェア2010 // 楽しく学んだ防災知識

ボランティア中心に赤十字をPR



会場となった東京タワーはライトアップでイベントを盛り上げました



できたての非常食を配る鶴田さん(右)

「今こそ、災害への関心を自助・共助の行動へとつなげよう」をテーマにした防災フェア2010が9月3日から5日、東京タワーで開催されました。

子育て世代の参加を期待

参加を期待

主催は内閣府と防災推進協議会(会長・近衛忠輝日赤社長)。日赤の活動を紹介するコーナーでは防災ボランティアを中心にAED(自動体外式除細動器)体験や救急法実演、炊き出した非常食の試食会などが行われました。

日赤のコーナーは、ボランティアの活躍する姿を通じて、赤十字ボランティア活動への理解と参加を促すことを目的に企画されました。東京都支部に所属する防災ボラン



ボランティア活動の魅力を語る荒尾一さん

救急法を体験した小さな看護師さん

ティアと港区赤十字奉仕団が3日間で延べ17人参加しました。

家族を守るために、子育て世代の方にはぜひ救急法や幼児安全法を身につけて欲しい

救急法の実践などを行なった荒尾一さんは「日赤のボランティアは人間関係が魅力。指導員として人に教える喜びもあります」と活動の楽しさを話します。

「自分自身とア歴25年の横山汎子さんは「自分自身と食の試食会。炊き出しを担当したボラン

ティアの鶴田福海さんは「耐熱性のビニール袋があればお米が炊ける。いざというときにはこんな方法もあることがPRできました」と手応えを話しました。

付議事項
1 予算の補正について
(高知赤十字病院の病院情報システム更新及び追加整備並びに岡山赤十字病院の借入金繰上償還にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正)
2 資金の借入について
(岡山赤十字病院の借入金繰上償還及び飯山赤十字病院の病院情報システム更新整備に

かかる資金の借入)
3 不動産の処分について
(古河赤十字病院の移転新築工事にかかる不動産の処分)
審議の結果、原案のとおり議決されました。
また、復興支援事業にかかるフォローアップ体制等、病院建物建築後の経営状況、日赤赤十字社の災害救護活動における現状と課題、熊本赤十字病院の不動産の取得にかかる入札結果、秋田赤十字病院等におけるドクターヘリの導入、中野赤十字病院の名称変更、予算の補正にかかる7月分及び8月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告いたしました。

大阪なんばに献血ルームオープン



明るいイメージの待合室

大阪のなんばに9月1日、「水辺の眺めのいい部屋」をデザインコンセプトにした献血ルームがオープンしました。その名も「まいどなんば献血ルーム」です。「まいど」は、大阪人にとって親しみがあり、元気がもらえる言葉。

「献血ルームは、部屋全体を海や空、大地をイメージしたアースカラーで統一し、リラックスペースを演出。待合・休憩スペースには、52インチの大画面テレビや無線LANシステムが用意されているので、自由にくつろいだり、仕事の合間に立ち寄るのにも便利です。」

「まいどなんば献血ルームがあるのは、地下鉄御堂筋線なんば駅の出口に直結したビルの4階。交通の便も非常に良く、若者の献血促進につながることを期待されています。」

献血後のサービスも見逃せません。アイスクリームやパン、お菓子などの提供のほか、イベントコーナー

PRイベントで献血を訴える山本シュウさん(左)とKOJIIさん



「みんなの交流の場」
PRイベントでアピール
オープンに先立ち、大阪府学生献血推進協議会のメンバーの協力によるPRイベントが8月28日、なんばパークスで開催されました。

ライフゲストとして参加したミュージシャン、秋休(あきやすみ)さんとSkyさんも「まいどなんば献血ルームがみんなの交流の場、献血のきっかけになってほしい」とアピールしました。

「まいどなんば献血ルーム」

大阪市中央区難波4-4-4
御堂筋難波センタービル4階

TEL 06-6649-2277
受付時間 10:30~13:00
14:00~18:30
(成分献血は17:30まで)

定休日 5月8日・年末年始

成分献血は予約制です。ご予約は専用ダイヤル080-2416-5310まで。翌以降の予約となります。
(予約受付時間 11:00~18:00)

常任理事会開催報告

平成22年9月17日、東京プリンスホテルにおいて平成22年度第5回の常任理事会が開催されました。

審議結果は左記のとおりです。

人道・博愛の精神を受け継いで

日本赤十字社の看護師養成

人間性豊かな 看護師めざし120年

看護師不足が社会問題となり、医療が高度化・複雑化するなかで、質の高い看護師の育成が社会的に求められています。日本赤十字社が看護師養成を始めて今年120年。確かな技術とともに、赤十字思想の根幹である「人道」を実践できる人材を社会に送り出しています。

看護を通して「人道」の実践めざす

日本赤十字社が看護師養成を始めたのは明治28年(1895)年、今年で120年という長い歴史を持ちます。この歴史と伝統の下、日本では、赤十字の基本原則である「人道の精神を身につけ、看護を通してそれを実践できる看護師の育成に力を注いできました。」

災害救護で活躍できる人材を

「傷ついた兵士を救済方法なく救いたい」という思いから創設された赤十字。日本が看護養成を始めた当時、赤十字は国内の災害時に活躍できる



救護班要員として活動するための知識と技術を学ぶ災害時の救護活動訓練。災害現場で自発的に気づき・考え・実行できる能力を養います

確かな技術力を身につける

災害などの場で力を発揮するためにも、看護師としての高い技術力と経験が必要で、そのために日本赤十字の看護養成では、実習を重視しています。全国に92の赤十字病院を持つ強みを生かし、学生一人ひとりが実際に患者を受け持ちながら、密度の高い実習を体験しているのです。

日本赤十字看護大学教授
看護実践・教育・研究フロンティア
センター長

川嶋みどりさん

インタビュー

「看護と言えは赤十字」「赤十字」とは看護」といふくらい、看護は日本の看板です。今はこの病院でも「患者中心」「安心・安全」がうたわれ、実践してきたのが日本赤十字の看護です。

人と人がふれあう看護を

「思ひやりの心」は誰でも持つことができますが、看護師はそれを気持ちに込めて、患者にそれを届けてあげます。私たちが看護教育を通じて、人間が大好きで、人間を心から尊重できる、そして人の世話を好んでやる看護師の育成を目指しています。

勇敢にして沈着なるべきこと

日航機墜落事故の救護活動を語る

日航機墜落事故から今年で20年。乗員乗客524人のうち生存者は1人のみという大規模で悲惨な事故に対し、日本赤十字社は15個班のべ1033人の救護員を派遣しました。その救護員の一人、前橋赤十字病院の前田陽子看護部長が9月15日、「日本赤十字社看護師養成120周年記念 看護学生をついて」で経験を語りました。



「救護員十訓」

日航機墜落事故は日本の災害医療の原典になったと同時に、赤十字の救護活動を振り返る機会にもなりました。通常の救護は被災者の命を救う活動です。しかしあのときは、損傷の激しい遺体を整える作業もまったく異なる任務でした。そのなかで私たちは、自分たちができることを一生懸命考えました。



JAL123便が墜落した群馬県・御巣鷹山尾根。遺体の大半は損傷が激しく、4カ月かかると身元確認は困難を極めました。犠牲者520人中518人の身元が確認されました

赤十字教育の大切さを実感

から2日後の8月14日でした。遺体収容の現場を見て、最初は思わなかった。次に頭に浮かんだのが、学生時代に学んだ救護員十訓です。そのなかの「勇敢にして沈着なるべきこと」という言葉が何度も自分に言い聞かせました。損傷の激しい遺体は身体の一部しか残っていませんでした。搬入された遺体が親指の先けいこうもあつた

植をのぞき込んで落胆する遺体を支えながら、遺族の心にもそう災害救護活動に努めました。

ナイチンゲールを映画化



11月には上映会も

今年にはナイチンゲール没後100周年。これを記念して日本赤十字看護大学看護実践・教育・研究フロンティアセンターでは、自然治癒力を基本としたナイチンゲールの提言は現代にも通じるものとして、その思想に焦点をあてた映画を制作しています。11月23日には「人間が人間をケアすること」と題したセミナーを開催。このなかで映画の上映も予定しています。

患者の心に寄り添える看護士に

「人のために働きたい」

「将来はやりがいのある仕事に就きたい」と思い、真っ先に浮かんだのが看護士でした。人のために働ける仕事だと思っただけでなく、人のために働くことに最もふさわしいと考えています。



ガン患者を受け持つ

え、進学を決めました。ガン患者を受け持つ。最初は「手術で治す」と語っていたのに、手術が近づいてきたら「やっぱりやめた」と弱音を吐くことも。言葉の裏側にある患者さんの気持ちを知ることが、とても難しく実感しました。

「夢は国際救援」

母が看護師です。仕事の話を聞くうちに私も看護師になりたいと思っただけでなく、看護士の魅力に惹かれました。看護士の魅力に惹かれて、戦争や災害で苦しむ子どもたちを助けたいと思っただけでなく、母が「患者さんから元気がもたらえる」と話してくれ



患者さんへの共感を大切に

実習では、ほとんど耳の聞こえない難聴の患者さんを受け持つことができました。「コミュニケーションが難しかった

受け持つ患者さんの苦しみや痛みを共有してあげられる。そういう看護士を目指したい、と思います。また、将来は助産師の資格にも挑戦したいと考えています。

スポーツとコラボ

ベイスターズの協力で救命手当体験コーナー

神奈川県支部は、救急の日
の9月9日、プロ野球公式戦
横浜対巨人戦が行われた横浜



ベイスターズのキャラクター「ホッシーナ」もAEDの使い方を熱心に体験

スタジアムで、心肺蘇生法やAED(自動体外式除細動器)など救命手当体験コーナーを開設しました。
横浜ベイスターズの協力で

体験コーナーを開いたのは、今回で3回目。同球団のキャラクター「ホッシーナ」と「ホッシーナ」もAEDの使い方などを学び、多くの人が救命手当を行えるようになるよう、大切さをアピールしました。
体験に参加した男の子は「ちょっと疲れたけど、いざというときに助けられるかも!」と語っていました。

J1静岡ダービーで赤十字をPR

8月22日、清水エスパルス対ジュビロ磐田戦が行われたエコパスタジアム(袋井市)盛りの上がる両チームサポーターに、袋井市赤十字奉仕団が赤十字活動をPRするチラシを配布しました。



暑さに負けない奉仕団パワー

紙芝居とクイズで赤十字を紹介

赤十字奉仕団「いち碗茶赤十字ボランティア」は8月25



日、豊後大野市の児童館(清川児童クラブ)を訪問し、小学生27人と交流。赤十字活動を紹介する紙芝居の公演や「献血クイズ」を行いました。

同奉仕団の安藤道子事務局長は「クイズは子どもたちの関心も高く好評。今後も活用したい」と話していました。
「缶ジュース350mlと同じ量の血液を採っても大丈夫」というクイズの正解に「そんなに!」と子どもたちからは驚きの声が上がりました

「託児は任せ!」託児専門奉仕団結成

子育てを応援していく奉仕団「赤十字子育て支援ボラン



当団は、赤十字行事などでの託児を担当。幼児安全法を学んだメンバーもいて、将来は活動を広げたいと意欲的です

「ばか力」で赤十字パワーをPR

北九州市門司区で9月5日に開催されたイベント「第17



「けんけつちゃん」は子どもたちに大人気。つなぎや玉入れにも参加しました

回・大里の「ばか力」に、日本赤十字社の運営する特別養老ホーム豊寿園と門司区地区赤十字奉仕団が合同で初参加しました。
愛知県支部は8月30日、一昨年の「8・28愛知県集中豪雨」で被害の大きかった岡崎



岡山県支部が実施した赤十字看護専門学校の災害看護演習には看護学生36人が参加



政府総合防災訓練として「広域医療搬送実働訓練」が岡山空港で実施されました



3000人が参加した愛媛県総合防災訓練に、愛媛県支部は日赤DMATを初派遣

もしもの備えに抜かりなし 各地の防災訓練に赤十字の旗

DMATやdERUも出動

防災週間(8月30日~9月5日)を中心に各地で防災訓練が行われました。日本赤十字社の各県支部からは、医療救護班やDMAT(災害派遣医療チーム)、防災ボランティアらが参加。消防や警察、自衛隊、他病院などとの連携の下、負傷者救護やトリアージ(治療・搬送の優先順位づけ)、搬送などの訓練に汗を流しました。



兵庫県合同防災訓練は、台風による河川のはんらんや土砂崩れなどを想定。各赤十字病院の医療救護班は丹波市赤十字奉仕団との連携の下、医療救護活動や被災者支援を訓練しました



静岡県・伊東市総合防災訓練では、伊豆赤十字病院救護班と防災ボランティアがdERU(移動式仮設診療所)を展開



イオン高知で実施された高知県総合防災訓練には、80人の日赤職員や救護班員などが出動するとともに、県支部に新配備されたdERUも展開

市へ災害救援用の毛布1000枚を配備しました。



岡崎市北部地域交流センター防災倉庫に配備された毛布

700回目の献血

9月2日に46歳の誕生日を迎えた小野晋さんが同日、仙



今回の配備により県内7カ所に約1万3000枚の毛布が備蓄されましたが、愛知県全域でより充実した救援物資を提供するにはまだ不十分。県支部では今後も計画的な備蓄を進めていきます。
台駅前の献血ルームアエル20を訪れ、通算700回目となる献血を行いました。
小野さん(右)は「これからも献血に協力したい」と抱負を語っています。

続報! JRCの夏の体験学習&国際交流

平和を学んだ夏のトレセン 埼玉



当時16歳であった少女から見た戦争を詳細に語る木村さん

開催。それぞれが工夫を凝らした企画に取り組みました。8月10日に滑川町立滑川中学校で行われた比企地区のトレセンにはJRCメンバー40人、指導者20人が参加。第2次世界大戦で救護員としてフィリピン(ルソン島)で活動した木村美喜さんを講師に招き、その体験を聞きました。真実から学んだ平和の尊さを「伝えること」の大切さを、改めて確認しました。



県内のJRCメンバーから寄せられたトピックアルバムを贈呈しました

交流を通じてメンバーからは、「貧しい生活環境の中で一生懸命に生きることを得ていることを得たい」という声も聞かれました。また、子どもたちへの給食支援ボランティア体験を行いました。

JRCメンバーがフィリピン訪問し交流

福島 福島県支部は第4回国際交流

流事業として8月16日から23日までJRCの高校生メンバーや指導者ら10人をフィリピンに派遣。小中学校を訪問し、その交流体験のほか、ゴミ拾

「私たちの姿に感動した」「恵まれた環境で暮らす自分たちの幸せを再認識した」などの感想が出されました。

「はなみずき」——小松島市の花にちなんで名づけられた患者図書室が今年7月、徳島赤十字病院にオープンしました。その運営を支えているのが、7人のボランティアです。

その一人、田上秀輝さん(67歳)は自身の病気をきっかけに「体の動くうちに患者さんのお手伝いができれば」という思いからボランティア活動を始めた。車椅子の方に、手の届かない所の本を取ってあげたりするとき、小さなことだけれど役に立ってたかなと嬉しい気持ちになります。入院中のことと

クロスアップひと



専門書の他児童書もあります

徳島赤十字病院 患者図書室「はなみずき」ボランティアスタッフ 田上秀輝さん(左) 多積敏久さん(右)

から、退院するとき笑顔でお礼を言われると本当に嬉しい」とそのやりがいを語ります。同院では、図書室も含めて現在27人のボランティアが活動しています。ボランティアは黄色いユニフォームを着用している。患者さんからは「これから行くので黄色の服の人に案内し

医療と患者さんをつなぐ 黄色いユニフォーム

てほしい」とリクエストがあるほど。入院・外来を問わずその存在は認知され、信頼されています。図書室では、利用者から職員や医師に言いたいことを打ち明けられるなど、患者さんと医療の間をゆるやかにつなぐ役割も果たしています。

地域住民にも広く開放されているこの図書室は、NPO「医療の質に関する研究会」から、図書・仕具の寄贈や、運営ノウハウの提供を受けて誕生しました。「患者さん自身が病気を治療法について理解し納得して、医療に積極的に参加してもらいたい」というのが開設の目的です。

現在の蔵書は約1000冊。今後さらに充実を図ります。病気の本がこれほど充実している一般の書店は、このあたりでは少ない。病気になる人だけでなく、健康な人や家族にももっと利用してもらおうと、病気の理解や予防につながるはずと多積さんは期待しています。

心からの寄付に感謝

長年の貢献に 社長感謝状 愛

15年間にわたって赤十字活動を支援している岡勉さん(愛媛日産自動車株式会社代表取締役社長)に9月6日、加戸守行日赤愛媛県支部長(愛媛県知事)が社長感謝状を贈りました。

岡さんは阪神淡路大震災の際に、災害救護活動を行っていた日赤に寄付。以来、日赤への募金を呼びかけました。

ロボットが募金を呼びかけ

大阪南港の複合商業施設ACTで8月23日から26日まで、大阪大学大学院工学研究科が開発した小型コミュニケーションロボットが、赤十字への募金を呼びかけました。



ユーモラスなロボットに子どもたちは大喜び。傍らには募金箱が設置されました。来場者は、トイレやイベント会場場所を教えたり、お店のクーポン券を発行するなどと、日赤の募金も案内。子どもも大人も楽しんで接していました。



阿波踊りで赤十字への支援を呼びかけました

阿波踊り通じ 徳

吉野川市阿波踊り振興協会が8月28日、「赤十字チャリティー選抜阿波踊り大会」を開き、会場で集めた6万1679円を日赤徳島県支部に寄付しました。阿波踊りを通じての募金は初めてです。

同市アメリッセンターで開かれた大会には市内外から10団体、約500人が参加しました。同協会の松島一光会長は「来年もぜひ開催したい」と語っています。

Voice&プレゼント

◆献血大好き! ——田中 蘭さん(藤沢市) 将来看護師になりたいと考えていたので、16歳になったら献血に行こう!と前から考えていました。痛さも感じず、快適にできました。今、周りの友達を誘って一緒に献血を楽しんでいます。

◆参考になった災害時の高齢者への接し方 ——匿名希望(札幌市) 災害時の高齢者への接し方(9月号特集記事)がとてもためになりました。災害はいつ起きるかわかりませんが、接し方を知っていたら、少しは何かできるのではないかと思います。

プレゼント応募方法

「赤十字新聞」や赤十字活動へのご意見や感想などを下記までお寄せください。毎月抽選で素敵な赤十字グッズをプレゼントします。

☆今月号のプレゼント 赤十字オリジナルTシャツを4名様に。ご希望の色とサイズ(MまたはL)を明記してください。

提供: (株)日赤サービス お問い合わせ・ご購入は 03-3437-7514まで



●郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社企画広報室 赤十字新聞係 ●FAX/03-3437-7091 ●メール/koho@jrc.or.jp (件名「赤十字新聞10月号プレゼント応募」) ●応募締切/10月25日(月)必着 ★ご投稿の際は、お名前、連絡先(住所・電話番号)を明記してください。匿名希望の際は、その旨もご記入ください。当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

10月の行事予定

開催日	行事名	開催場所	問い合わせ先・備考
10月9日(土)	第23回 全国健康福祉祭いわかみ大会 (ねんりんピック石川2010)	県産業展示館4号館(金沢市)	救急法・健康生活支援講習などを実施。日赤石川県支部 ☎076-239-3880
10月16日(土)・17日(日)	ワールド・ファースト・エイド・デー	環水公園周辺(富山市)	全国スボレク祭内に健康コーナーを設け、日赤富山県支部 ☎076-441-4885
10月23日(土)	第14回 赤十字救急法競技会	横浜文化体育館(横浜市)	見学・応援は申込不要。来場自由。無料。日赤神奈川県支部 ☎045-681-2123
10月25日(月)~29日(金)	赤十字写真展「あれから1年~西スマトラ地震、フィリピン台風の災害復興現場から~」	SPACE NIO(東京都)	無料・特設WEBサイト www.2009saigai.jp

インタビュー INTERVIEW

被災者2100万人 パキスタン洪水救援



求められる貧困問題へのアプローチ

7月末からの洪水により2100万人が被災したパキスタン中南部。日本赤十字社では各国赤十字社と共同で緊急支援活動を行っています。1カ月にわたり被災地に派遣され、このほど帰国した河合結子看護師（大阪赤十字病院）に、被害の状況や今後求められる支援などについて話を聞きました。

暑さの中で熱中症、脱水症も続出

河合さんが向かったシンド州カイルプール郡は、首都イスラマバードから約1100キロの農村地帯。約16万人の被災者がいます。そのほとんどはサトウキビやトウモロコシなどの農業や水牛などの放牧で生計を立てている農民ですが、被災地に近づくにつれて大きな水たまりが目立ち始め、洪水で家や畑を失った人々が路上にあふれかえっていました。

「一面が湖のようになっていた被災地もありました。被害状況を調査するため、そこから先の村へ向かう際には、持参したボートで移動しなければならなかったほどです」

被災者は避難民キャンプや近くの学校に避難していますが、避難所によっては、十分な支援が行き届かず、健康状態が極度に悪化している地域も少なくなかったといいます。

「汚染された水による下痢や、全身の皮膚がただれてかゆみに襲われる疥癬に多くの人が苦しんでいました。40度を超える猛暑です」



水浸しをまぬがれた場所にビニールシートを張って暮らす

から、熱中症、脱水症状を起こす人も少なくありません。生命の危険があると判断した乳幼児を病院に運んだケースもありました」

医療支援だけでは解決しない

こうした深刻な健康面の問題が発生しているながら、被災者が求める一番の支援ニーズは医療ではありませんでした。そこに今回の救援活動の難しさがあると河合さんは指摘します。

「被災地はもともとが非常に貧しい地域。栄養失調に苦しむ子どもは以前から大勢いましたし、衛生環境も悪かったのです。これらの問題の根本には貧困があります。ですから、医療に焦点を当てた支援を進めるだけでは、被災地が抱える根本的なニーズからズレてしまうのです」

洪水被害への救援・復興活動を、人々の求める貧困対策とどうマッチングさせていくのかが大きな課題。これをクリアするには、「外からの支援だけではなく、被災者の皆さんと



体中に湿疹が出てしまった子どもを手当する河合看護師

同じ目線で、どんな支援ならば健康な生活を実現できるのかを一緒に考えていくことが大切」と河合さんは強調します。

被災者が自立できる支援を

避難所で広がる下痢症状の改善へ、他の支援団体が汚れた水を殺菌する薬剤を配付しました。ところがほとんど使われなかったといいます。

「漂白剤の臭いが嫌われたんですね。そこで、水を煮沸する方法を指導しました。でも40度を超す猛暑の中で熱いお湯なんて誰も飲みたくない。面倒だし、燃料も必要です。結局これも浸透しませんでした」

別の支援団体が避難所に設置したトイレは、普段トイレで用を足す習慣のない子どもたちにまったく使われず、保健衛生上の何の役にも立ちませんでした。

「正しいことだからと、支援者側のやり方を押しつけるだけでは、被災者への支援になりません。彼ら自身に問題点に気づいてもらい、解決法を見つけて動いてもらう。そのため支援こそが求められていると思います」

建国史上最悪といわれる今回のパキスタン洪水被害に対し、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）はパキスタン赤新月社を通じて救援活動を展開。日本赤十字社も、IFRCの支援要請に応え、合計4000万円相当の救援物資の支援を行いました。また、IFRCは専門家チームと資機材から構成される緊急対応ユニット（ERU）による救援活動を展開。日赤はこのERUチームの一員として、これまでに河合看護師をはじめ8人のスタッフを派遣しています。ERUの活動に続きIFRCは復興に向けた支援を再来年の春ごろまで継続していく予定です。

支援地訪問レポート

インドネシア・西スマトラ地震から1年

ゴトンロヨンに支えられて

首都ジャカルタから空路で1時間半、滑走路に近づくにつれ、この地方特有の水牛の角型をした屋根が視界に飛び込んできます。世界で6番目に大きい島、スマトラ島・西スマトラ州の州都パダン。昨年9月30日、マグニチュード7.6の地震に襲われ、死者1195人、負傷者2902人、全壊家屋11万4787棟など甚大な被害に見舞われました。

一見すると被害の形跡は見当たりませんが、注意深く観察すると一部のリゾートホテルなどは屋根や外壁が崩壊し、鉄骨は剥きだしに。地震の爪痕はまだ残されています。

今回の被害の特徴は、山間部で住まいを失った住民が数多くいることでした。国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）とインドネシア赤十字社は、住宅資材の購入費用を被災者に提供し、耐震強度を高める技術的指導を行っています。このほかにも保健衛生知識の普及や



インドネシア赤十字社のスタッフが被災者から揺れに強い工法を学ぶ

飲料水の供給、こころのケアなどのプログラムを実施してきました。

赤十字支援で住宅再建

最初に訪問した事業地では、被災者の男性がインドネシア赤十字社から支給された木材



復興現場には笑いが絶えないを使い、家の骨組みを組立てていました。「家族にけが人はいませんでしたが、地震で家が全壊してしまい、自宅脇のアヒル小屋で家族5人が寝泊りしていました。今も小さなスペースで暮らしています。この家ができれば家族がここに移れるのでうれしい」と男性は作業の手を休めて話してくれました。

作業現場には地元のインドネシア赤十字社のボランティアの姿も。約10キロ離れた場所から通う彼女たちの役割は、赤十字の提供資

金が適正に使われるように1週間に1回チェックすること。地域には全体で300のコミュニティがあり、それぞれ3人のボランティアが担当しています。災害が起こったときの避難誘導や緊急時の支援も仕事の一部です。

「赤十字ボランティアに参加するのは心か呼んでいるから。人間は困ったときには助け合う、そういう存在だと思う」と笑顔で語ります。

暮らしの再建支える地域の互助精神

次に訪れた被災地では、こころのケアの一環として、集会所で子どもたちが楽器を演奏していました。その前庭では赤ん坊を連れた母親たちが助産師に健康相談をしています。

「インドネシアでは、住民が村の集会所などに定期的に集い、悩みを相談したり、催しものをする慣習があります。これはインドネシア語で『ゴトンロヨン』と言われる『困ったときには互いが助け合う』精神が土台になっています」とボランティアの一人は教えてくれました。インドネシア赤十字社ではこうした場を活用し、保健衛生知識の普及や、地震のトラウマで心を閉ざした子どもたちとのレクリエーション活動を行っています。

災害に見舞われることが多いこの国で人々の暮らしの再建を支えていたのは、コミュニティと赤十字ボランティアに根付くゴトンロヨンの精神——今回の訪問でそのことを改めて確認することができました。

（日本赤十字社 企画広報室 津村慎太郎）

